

令和6年度 文京区障害者地域自立支援協議会
第3回子ども支援専門部会 要点記録

日時 令和6年10月30日（水）午後2時02分から午後3時59分まで

場所 文京シビックセンター3階 障害者会館会議室C

<会議次第>

1 開会

2 議題

(1) 令和6年度子ども支援専門部会研修会振り返り、来年度の研修会について

3 その他

<出席者>

向井 崇 部会長、勝間田 万喜 副部会長、高山 直樹 部会員、荻野 美佐子 部会員、
高山 陽介 部会員、内田 千皓 部会員、町田 寛子 部会員、鶴沼 苗子 部会員、
川崎 洋子 部会員、加藤 たか子 部会員、小野寺 素子 部会員

<欠席者>

内海 裕美 部会員、高橋 拓也 部会員、井上 アヤ乃 部会員

<傍聴者>

2名

1 開会

本日の予定の説明等

2 議題

(1) 令和6年度子ども支援専門部会研修会振り返り、来年度の研修会について

資料第1-1号について、向井部会長から説明

- ・アンケートには、ポジティブな意見が多いが、答えてくださった方のものだと念頭に置いて理解できるといい。
- ・それぞれが普段目の前にしている子ども、家庭についての関心、フォーカスが非常に強く、広い観点から、子どもの全体や未来について考えるのが難しい。自己選択性、自分で選べることが大事だが、子どもたち、サポートが必要な家族も含めて、自分が知らなければいけない情報を知ることができていない。その情報の中に、将来の自分について考えるための材料や、教育の場、経験の機会を用意して、リンクさせるかが課題になる。ある程度年齢が上がったときに何が必要かを、他の年齢段階の人に関わっている人たちも知る必要がある。
- ・連携を取るためには、子どもたちのいろんな側面から、ストレngthスやパワーを確認しつつ、役割分担をはっきりさせていく、ある意味でケース検討会議を少しずつ広めていく必要がある。大事なものは、結束点を作るために、総合的、全体的に見る人がいないといけない。相談支援事業所のソーシャルワーク的な機能が今求められて、結束点を作っていく動きをしていない限り、難しい。

連携がないことや、切れ目ある支援のしわ寄せは、子どもたちや家族に行くが、最終的には者のところに影響を及ぼすので、者のところからのフィードバックも加えてもいい。

- ・学校側と連携する機会があるが、何を目的にするかが大事。前回の研修会で、SSWと話をしたとき、私としても学校に電話するのはハードルが高いと思っていたが、SSWも福祉側と連携が取りにくいような話が出ていた。お互い連絡の方法とか、窓口がもう少し分かりやすく見えるといい。関わりのあるSSWは、相談もあるが、つながっていない方たちが、宙ぶらりんになっている。
- ・SSWも自分で動いて、こういう資源があるという情報を知るが、あくまで自分が動いているところしか知らないなので、文京区ってこんなに資源があったというのをこの研修で知れたのは結構大きかったという話があった。
- ・SC、SSWは、学校に配属されると、校長、副校長先生の管理下で学校の一員として動く。一

人だけの考え、判断でなく、学校として動く。

今までの学校にはなかった動き方で、学校の先生方も戸惑っている部分もあるので、役割を学校現場に伝えていく必要がある。一方で、SC、SSWも学校の一員として対応を進めるので、一人で全て背負っているわけではないことも認識しつつ、両方をうまく進めていくことで、せっかく全校配置を達成しているのに活かさないことがないようにされたい。

・SSWとSCの曜日が違うと連携ができない場合もあるし、保護者の立場だと、SSWは学校側で相談できないから教育センターの総合相談に行く場合もあって、学校の先生には言いにくいことでというところが、教育センターにあるということはよく聞く。

もっと自由に色々なところとやり取りできることが、そもそもソーシャルワーク。

・区内の中学校にはSSWがいるが、定期的に特別支援学校が呼ばれる。

発達障害系の子どもについては、特別支援学校のセンター的機能を使ってくださいと、区から、全校に通知があるということもあって、特別支援学校が動いている。

・不登校の相談はSSWかもしれないが、不登校の方たちの多くは発達障害がある可能性もあり、本当は被っているはずなので心配。子どもを中心に、いろんな人がその子の実態を見ていけるか、場をどう作っていくかというところは必要。

・多岐に渡る社会資源を把握することは難しく、また、全ての制度を知っていれば良い支援ができるかというものではない。担当職務をしっかりやった先の連携だと思う。困難を突破する際はリスクを伴う事も多いので組織として守られている必要がある。

・最初から、要注意の家族とか子どもに関しては複数に関わることを前提に見ていくことを、仕組みとして作れば良いと思いつつ、支援者の負担が増えてしまう。

・生きた事例検討をして、顔が見える関係を作り、そこから地域課題を抽出すれば良い。好事例を持ってきて、事例検討すると、それは教育と福祉の連携で、何が足りないじゃなくて、こういうことが大切ということが見えてくる事例検討会がポイントになる。

・福祉の言葉がまず分からなかったのも、何か言葉の共通言語を作って、深められたらありがたい。

・園にいる子どもたちと保護者には顔を合わせて話ができるが、最近、一時保育や、見学とかでいらっしゃる方も多く、まだどんなサービスがあるかが伝わっていない。

広く周知すると、保育園に来ている保護者だけじゃなくて、地域の人たちにもいい。

・学校との関係性をつくるのは、簡単ではないので、機能するかどうかは課題だし、福祉側の質を担保するのも重要。連携しないで自分たちだけでやったほうが良いと福祉側が思われる

とまずいので、こちらも質を上げていく努力をしていかないといけない。

- ・先生方も忙しい中で連携するのであれば、実のある連携がしたいだろうし、そのためにも、その子の実態をどう捉えているのか、アセスメントをどう読んでいくかとかも含めて課題がある。きっかけとして、自立支援協議会で、顔の見える関係を作っておくことで、特別支援学校だけではなくて、支援学級の先生とか、通常学級の先生とか、あるいはSC、SSWの方たちも含めて、子ども中心に話し合っていくことができることが理想。
- ・1人の方がずっとケースを追うことは難しいが、リレー方式で、バトンを落とさずにいくためにも、どこまでつなげられる資源があるか。サービスが変わるときにどう連携していくか。
- ・子ども支援専門部会の事例検討なので、個人情報配慮しながらも、好事例を幾つか出していく。好事例だったけども、その次どうしようとか、問題はどのようにいこうというのを、文京区の資源の中でどうするかというところが出てきて、親会に上げていくほうがいい。クローズの事例検討として、このメンバーの中での事例検討会を一度やってみて、あとはもうちょっとぼやかして、いろんな事例を大きくやる。
- ・クローズなメンバーの中で守秘義務をとというのはありだが、人数が多くなればなるほど難しくなり、仮に好事例であったとしても、批判的な目で意見が出てくることはあり得るので、当事者が傷つくことがあってはならない。限られた中で考えて、そこから、ある程度の共通のポイントが絞れたら、架空事例を組み立てて、オープンなところで検討するとよい。

以上